2013 年度英語プレイスメント・テスト結果

遠藤雪枝

Abstract:

The Results of English Placement Test

The purpose of this article is to report the findings from the results of an English Placement Test (hereafter EPT). Beginning in the spring semester of 2011, we have administered the TOEFL ITP test for incoming freshmen. Freshmen are given an EPT twice a year, once at the beginning of the academic year and again at the end of the academic year. Sophomore students are given an EPT at the end of the academic year. The EPT aims to measure students' English ability and to optimize the students learning experience by better determining which areas of the multi-faceted English skills needed to be strengthened.

要 旨：

本学では、英語プレイスメント・テスト（English Placement Test、以下 EPT）を、共通基礎（英語）クラス分けと学生の英語力伸長度測定のため、および共通基礎（英語に代わる外国語）履修許可認定のために、一年次に 2 回（前期始めと後期終わり）、二年次に 1 回（後期終わり）実施している。また、このテスト結果は、英語英文科および地球市民学科での科目用クラス分けにも活用されている。2011 年度より、EPT として TOEFL テスト ITP（Level 2）を導入したので、本稿では、TOELF-ITP の概略を提示し、その結果を報告する。

キーワード：

English Placement Test (EPT)、英語力向上

1. TOEFL テストについて

1.1 TOEFL テスト導入の理由

外部テストは大量のデータとテスト理論に基づき、専門業者によって多くのバージョンが作成され、信頼性・妥当性が高いので、本学の英語プレイスメント・テスト（English Placement Test、以下 EPT）に外部テストを導入している。TOEFL テストとは Test of English as a Foreign Languages の

略で、項目応答理論（IRT=Item Response Theory）に基づいて作成された国際基準の英語運用能力テストであり、どのテストを受験しても各回のテストスコアを同一の評価基準で測定することができるので、その信頼性・妥当性の高さは世界中の教育機関で認められている。特に TOEFL は「アカデミック・イングリッシュを身につけること」を目標としており、大学生の「英語運用能力を身につけること」という目標と合致している。

1.2　本学で実施している TOEFL テスト

現在日本国内で一般向けに実施されている TOEFL テストは TOEFL iBT であって、インターネットによるテストだが、本学で実施しているテストは TOEFL テスト ITP であり、ペーパー形式の団体向けテストである。

TOEFL テスト ITP には難易度の異なる 2 種類のテストがあり、Level 1 は、問題数 140 問、試験時間 115 分、Level 2 は、問題数 95 問、試験時間 70 分となっている。本学では、初めての学生でも受験しやすいように、また短時間でも実施できるように、スコアが 500 点以下の人を対象にした易しいテストである Level 2 を実施している（500 点満点）。

1.3　TOEFL テスト ITP（Level 2）の問題構成

TOEFL テスト ITP（Level 2）は、Section 1，Section2，Section3 から成っており、Section 1 はリスニング、Section 2 は文法や語彙を問う問題、Section 3 はリーディング問題となっている（図 1、図 2 の表で、それぞれ、L, W, R と表記）。全体のスコア（図 1 と図 2 の TOT）は、各セクションのスコアを足して 3 で割ったものを約 10 倍したものとなっている。

2.　2013 年度 1 年次生の英語プレイスメント・テスト結果

学生の 1 年間の英語力の伸長度を検証するために、2013 年 4 月実施の EPT と 2014 年 1 月実施の EPT の数値を、学生全体、学科ごと、英語の習熟度別クラスごとに分類し、比較検討した。

2013 年 4 月実施の EPT と 2014 年 1 月実施の EPT に関して、それぞれ以下のように「関連のあるサンプルの平均値の差の検定」を実施した。

［仮説］2013 年 4 月実施の EPT より、2014 年 1 月実施の EPT の方が数値が高い

・帰無仮説：2012 年 4 月実施の EPT と 2013 年 1 月実施の EPT の母集団の平均値の差がない

・自由度 df （＝N－１）

・片側検定

・有意水準１％

・ｔ値＝$\Sigma D \div \sqrt{\{ N\Sigma D^2 - (\Sigma D)^2 \div df\}}$

Ｄ：2 回のサンプルデータの差

D^2：Ｄの二乗

Ｎは測定サンプル数

上記の検定を、例えば、英語英文科全体に対して実施すると、以下のようになる。（TOEFL の各 Section の比較ではなく、TOEFL 全体のスコアが伸びているかどうかを検討。）

・自由度 df （＝N－１）＝120

・片側検定

・有意水準１％

・ｔ値＝$\Sigma D \div \sqrt{\{ N\Sigma D^2 - (\Sigma D)^2 \div df\}}$ ＝$1{,}408 \div \sqrt{\{(120 \times 73{,}198 - 774{,}400) \div 120\}}$

＝5.88265

Ｄ：2 回のサンプルデータの差（49,989－48,581＝1,408）

D^2：Ｄの二乗

Ｎは測定サンプル数（121 件）

得られた t 値は 5.88265 であり、df 120 、片側検定の有意水準 1% 時の t 値は、2.358 である。従って、「1%水準で有意差がある」と言え、帰無仮説を否定でき、2014 年 1 月実施の EPT の方が 2013 年 4 月実施の EPT よりも数値が高く、学生の英語力が伸びていると言える。

同様の検定を、それぞれ学科ごと、英語の習熟度別クラスごと（1～15 の

数字は、習熟度別クラスを示し、「外」とは、英語ではなく、英語以外の外国語を必修とした場合を意味する）に実施し、各 Section ごとと全体の数値を比較検討した。結果は、図 1 の通りである。「L の評価」は Section 1 の結果を、「W の評価」は Section 2、「R の評価」は Section 3、「TOT の評価」は TOEFL 全体の結果を表している。「1%有意」とは 99%の安全率であり、「数値が伸びていると 99%言える」ということを意味している。同様に、「5%有意」とは「数値が伸びていると 95%言える」、「10%有意」とは「数値が伸びていると 90%言える」ということである。「×」が付いている箇所は、「有意とは言えない」、つまり、「2014 年 1 月実施の EPT の方が 2013 年 4 月実施の EPT よりも数値が高くなく、学生の英語力が伸びていると言えない」ことを意味する。

	データ数	2013年 4月 L	2013年 4月 W	2013年 4月 R	2013年 4月 TOT	2014年 1月 L	2014年 1月 W	2014年 1月 R	2014年 1月 TOT
全体	457	18644	17658	17242	178469	18507	17572	17663	179136
英文	121	5071	4825	4679	48581	5104	4957	4936	49989
西文	65	2719	2590	2556	26214	2707	2523	2546	25916
日文	94	3716	3495	3415	35420	3643	3372	3480	34982
地民	69	2857	2762	2689	27688	2876	2815	2795	28288
文化史	108	4281	3986	3903	40566	4177	3905	3906	39961
英語Ⅰ（講読）(1)英・西	28	1247	1264	1202	12376	1212	1226	1227	12214
英語Ⅰ（講読）(2)英・西	29	1253	1203	1194	12166	1230	1216	1249	12314
英語Ⅰ（講読）(3)英・西	28	1162	1129	1092	11277	1173	1136	1117	11421
英語Ⅰ（講読）(4)英・西	28	1152	1053	1037	10804	1167	1114	1088	11230
英語Ⅰ（講読）(5)英・西	27	1079	984	965	10094	1090	1020	1002	10373
英語Ⅰ（講読）(6)英・西	27	1026	937	898	9536	1050	928	941	9730
英語Ⅰ（講読）(7)日・史・地	23	1021	986	984	9971	946	966	974	9619
英語Ⅰ（講読）(8)日・史・地	24	1013	1006	970	9962	1012	1021	1002	10114
英語Ⅰ（講読）(9)日・史・地	25	1041	984	990	10050	1039	983	1008	10101
英語Ⅰ（講読）(10)日・史・地	24	983	921	920	9414	934	908	938	9266
英語Ⅰ（講読）(11)日・史・地	24	960	906	888	9176	939	912	911	9207
英語Ⅰ（講読）(12)日・史・地	23	902	845	852	8663	907	894	869	8901
英語Ⅰ（講読）(13)日・史・地	23	905	840	801	8486	882	844	821	8492
英語Ⅰ（講読）(14)日・史・地	22	846	770	741	7855	832	718	756	7687
英語Ⅰ（講読）(15)日・史・地	23	828	769	744	7804	851	743	762	7855
基礎英語Ⅰ（総合）(1)日・史・地	23	879	819	794	8306	869	777	781	8090
基礎英語Ⅰ（総合）(2)日・史・地	23	843	764	732	7798	871	749	757	7922
上級英語Ⅰ（講読）日・英・西・史・地	24	1123	1101	1069	10974	1129	1074	1091	10981
外国語	9	381	377	369	3757	374	343	369	3619

2013 年度英語プレイスメント・テスト結果

	L の t 値	W の t 値	R の t 値	TOT の t 値	L の評価	W の評価	R の評価	TOT の評価
全体	−1.88192	−0.96167	5.63624	1.28635	X	X	1%有意	X
英文	0.94711	3.03336	7.25890	5.88265	X	1%有意	1%有意	1%有意
西文	−0.46078	−2.19672	−0.34642	−1.77075	X	X	X	X
日文	−2.04858	−3.30291	1.85708	−1.77315	X	X	5%有意	X
地民	0.66447	1.30630	3.31579	2.55757	X	X	1%有意	1%有意
文化史	−2.96145	−1.93713	0.09861	−2.95441	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(1)英・西	−1.89412	−1.85552	1.18848	−1.24166	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(2)英・西	−1.24643	0.62692	3.15892	1.54930	X	X	1%有意	X
英語Ⅰ（講読）(3)英・西	0.70814	0.35204	1.54440	1.19079	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(4)英・西	0.94498	2.66791	3.17946	3.44061	X	1%有意	1%有意	1%有意
英語Ⅰ（講読）(5)英・西	0.68473	1.61921	1.99781	2.69768	X	X	5%有意	1%有意
英語Ⅰ（講読）(6)英・西	1.25410	−0.59544	2.43410	1.80127	X	X	1%有意	5%有意
英語Ⅰ（講読）(7)日・史・地	−5.00912	−0.88855	−0.42739	−2.73943	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(8)日・史・地	−0.05365	0.78309	1.63447	1.13074	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(9)日・史・地	−0.11205	−0.06447	0.83043	0.46985	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(10)日・史・地	−2.82187	−0.79237	1.29728	−1.60810	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(11)日・史・地	−1.39676	0.29572	1.69259	0.27188	X	X	10%有意	X
英語Ⅰ（講読）(12)日・史・地	0.29125	2.65989	1.25887	1.97395	X	1%有意	X	5%有意
英語Ⅰ（講読）(13)日・史・地	−1.50297	0.18058	1.34784	0.05401	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(14)日・史・地	−0.82770	−2.01280	0.95646	−1.07601	X	X	X	X
英語Ⅰ（講読）(15)日・史・地	1.92888	−1.31031	1.01994	0.48934	5%有意	X	X	X
基礎英語Ⅰ（総合）(1)日・史・地	−0.68533	−2.25675	−0.97614	−2.46385	X	X	X	X
基礎英語Ⅰ（総合）(2)日・史・地	1.98714	−1.17752	1.51686	1.47202	5%有意	X	X	X
上級英語Ⅰ（講読）日・英・西・史・地	0.42556	−0.95964	1.04122	0.04732	X	X	X	X
外国語	−0.50387	−4.97265	0.00000	−1.85415	X	X	X	X

3.　2012 年度 1 年次生の英語プレイスメント・テスト結果（2 年間の経年調査結果）

2012 年度に 1 年次だった学生の場合、2012 年 4 月、2013 年 1 月、2014 年 1 月の 3 回、EPT を受験していることになるので、2 年間の経年調査結果を以下に記したい。

学生の 2 年間の英語力の伸長度を検証するために、2012 年 4 月実施の EPT と 2014 年 1 月実施の EPT の数値を、学生全体、学科ごと、英語の習熟度別クラスごとに実施し、比較検討した。

上記同様、2012 年 4 月実施の EPT と 2014 年 1 月実施の EPT に関して、それぞれ以下のように「関連のあるサンプルの平均値の差の検定」を実施した。その結果は、図 2 の通りである。

	データ数	2012年 4月 L	2012年 4月 W	2012年 4月 R	2012年 4月 TOT	2014年 1月 L	2014年 1月 W	2014年 1月 R	2014年 1月 TOT
全　体	374	15391	14575	14780	149155	15365	14531	14823	149067
英　文	114	4810	4623	4669	47004	4860	4608	4771	47459
西　文	48	2020	1894	1934	19494	1972	1827	1885	18949
日　文	66	2628	2467	2520	25381	2560	2462	2506	25098
地　民	61	2569	2469	2516	25183	2598	2528	2507	25445
文化史	85	3364	3122	3141	32093	3375	3106	3154	32116

	L の t 値	W の t 値	R の t 値	TOT の t 値	L の評価	W の評価	R の評価	TOT の評価
全　体	−0.41281289	−0.4770346	0.563665258	−0.16834656	X	X	X	X
英　文	−2.14571238	−2.41208088	−1.64862381	−2.98325634	X	X	X	X
西　文	−2.14571238	−2.41208088	−1.64862381	−2.98325634	X	X	X	X
日　文	−2.74597731	−0.12441459	−0.46860921	−1.36476257	X	X	X	X
地　民	1.220615407	1.745388991	−0.29562004	1.375764434	X	10%有意	X	X
文化史	0.372542608	−0.38610973	0.387020356	0.10285183	X	X	X	X

4.　考察

今年度 1 年次生は、昨年度の 1 年次生と比較する限りでは、(昨年度のデータは、『清泉女子大学　言語教育研究　第 5 号をご参照下さい』)、TOEFL ITP テストのスコア―結果から判断すると、2013 年 4 月から 2014 年 1 月までの間の英語力の伸びている学生の比率は上がったと言えるだろう。しかしながら、今年度 1 年次生は、リスニングに関しては、全ての学科で英語力が伸びていない。数値が伸びているのは、Section 3（リーディング）のみである。それも、全学科ではない。この原因は何なのだろうか？学生の基礎学力の問題なのか？それとも、学習方法の問題なのだろうか？現段階では早急にその答えを見出すことはできないが、昨今言われている学生の基礎学力低下と関係があるのかもしれない。そうであれば、英語教育に関する初年次教育を検討する必要があるだろう。今後さらなる経年調査を実

施し、データを蓄積し、分析する必要がある。

今年度 1 年次生の EPT 結果を踏まえ、学生の英語力向上のために、さまざまな事項を再検討しなくてはならない。折しも、今年度、共通基礎（英語）クラスに関する英語教育の指針や目標を再考し、2014 年度から「英語 I（講読）」、「英語 II（講読）」のクラスにおいて、統一テキストを使用することを決定した。統一テキスト使用が、どのような効果をもたらすかに関しても、今後調査していきたい。

一方、今年度 2 年次生の場合、2012 年 4 月から 2014 年 1 月までの 2 年間で、英語力が伸びている学生が少なかった、ということが言えるだろう。英語力が伸びていたと数値が表している箇所は、地民の Section 2（文法・語彙）のみであり、しかも 1%有意ではなく、10%有意（＝数値が伸びていると 90%言える）である。2 年次生の場合、昨年度 1 年間では、英語力は伸びている箇所が多かった（昨年度のデータは、『清泉女子大学　言語教育研究　第 5 号をご参照下さい』）。とすると、受験などで身についていた英語力は、入学直後は維持できていたが、次第に低下してきたと言えるのかもしれない。そうだとすると、学生の英語力維持、そして増強に対する策を再考する必要がある。

EPT を一年次に 2 回（前期始めと後期終わり）、二年次に 1 回（後期終わり）実施することにより、学生は入学後の英語力の伸長度を知ることができる。教員側としても、入学時と二年次終了時の両方の TOEFL ITP テストのデータを統計的に分析・比較することにより、全体的にスコアは伸びているか、どのレベルの学生が伸びているか、または伸び悩んでいるかなどを知ることができ、本学の英語教育の効果がどのくらい表れているかを確認することができる。EPT は、英語の習熟度用クラス分けのためだけではなく、現行の英語のカリキュラムを振り返り、より良くしていく上で大変役立つ。2011 年度から実施した TOEFL ITP テストはまだ 2 年分のデータしかないので、学生の長期的な英語力の変化を見るために、今後さらにデータを蓄積していく必要がある。